

金曜ジャーナリズム塾

第7講

講師

西嶋 真司

地方テレビ局でドキュメンタリーを制作。ジャーナリズムの追求は組織との摩擦も生むが、映像作家として独立後も「組織の中で声を上げ続けることが大事」と語る。

「都合の悪い歴史」を記録する

「客観性」に感じた限界

大学時代に所属していたラゲビ1部の先輩の紹介で、1981年に「RKB毎日放送」に入社し、報道部に配属されました。入社10年目にTBS外信部に向向する形で、特派員としてソウルに赴任しました。当時の韓国はまだ軍事政権の影響が残り、民主化が進んでいる時代です。激しい学生デモと催涙弾の匂いを印象深く覚えていきます。

94年に福岡に戻り、報道部で地元経済や政治を題材にした特集を制作していました。三井三池炭鉱の閉山や朝鮮学校の問題なども扱いました。報道番組では、双方の意見をバランスよく扱う客観性が求められます。自民党市議団の不当な資金集めや利権争いの特集を制作した時には、上司から「もう少しバランスを考えて取材しろよ」と言われました。

権力をテーマにする場合は、双方の言い分を並べるよりも弱い側の視点から見るべきだと考えています。客観性が求められる報道ドキュメンタリーでは、それが難しいと悩み始めたところに制作部へ異動になりました。

制作部では、戦争ものの番組を多くつくりました。たとえば、真珠湾攻撃の1時間前に決行されたマレーシア・コタバルへの上陸作戦。防衛省の資料には、太平洋戦争の始まりはコタバルだったという記録が残っていますが、日本にとって都合が悪いことなので戦後教育では教えられず、多くの日本人の記憶から消されてしまいました。権力にとって都合の悪い歴史を変えようとする力は、今も働いています。ジャーナリストがやる

『抗い 記録作家 林えいだい』

ジャーナリストの林えいだい（1933年～2017年）は、福岡県筑豊を舞台に、朝鮮人強制労働や炭鉱・港湾労働、特攻作戦、北九州の公害の実状などを取材。徹底した聞き取りを通じて、虐げられた人々に視点を当て続けた。映画は、がんに侵されながらも特攻作戦をめぐる「ある事件」に迫ろうとする林の晩年を描く。（編集部）

2016年/日本/100分



©グループ現代

べき仕事は、歴史を正しく記録して消されないようにすることだと思えます。

この番組は2011年12月8日、開戦70周年の日に放送しました。

た。「侵略戦争」という言葉を使ったことで、右翼から非難されました。「街宣車で会社の前に行くから待って」という電話があったので、僕は「では会いましょう」と

「金曜ジャーナリズム塾」は、ジャーナリストを目指す大学生を対象に2019年6月～20年2月まで毎月開講する。新聞労連などを通じて受講生を募集した。塾の成果を広く共有するため、講義内容や質疑応答などを掲載する。（編集部）